

令和5年度 文化・観光特別委員会行政視察報告

1. 視察期間 令和5年11月9日（木）～10日（金）

2. 出席者

(1) 委員

委員長 中澤 史夫、 副委員長 秋間 洋

委員 大貫はなこ、 岡田勇一郎、 石川 義弘、 早川 太郎、 石塚 猛、
太田 雅久、 小坂 義久、 青柳 雅之

(2) 同行理事者

文化振興課長 川口 卓志

3. 視察先及び調査事項

(1) 山形県山形市 ユネスコ創造都市やまがたについて

(2) 宮城県仙台市 せんだい・アート・ノード・プロジェクトについて

4. 調査の概要

別紙のとおり

【山形県山形市】

1. 市の概要

人 口 242,692人（令和5年7月1日現在）

面 積 381.58㎢

主な特色

- ・ 県中央東部、山形盆地の南東部に位置し、戦国時代に城下町の建設が行われ、現在の市街地の原型を形成。
- ・ 江戸時代には染料や口紅の原料となる紅花の一大産地、また最上川船運による商業のまちとして栄えた。現在も商業が盛んであり、近年は山形新幹線や高速道路の整備に伴い、広域交通条件が向上。
- ・ 令和元年度には中核市へ移行し、県庁所在地として都市力を上げている。

2. 調査事項

ユネスコ創造都市やまがたについて

(1) ユネスコ創造都市やまがたの概要

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が、文化の多様性を保持するとともに、都市間の国際的な連携により、都市が持つ創造の力・文化による発展可能性を最大限に発揮させる枠組みとして「ユネスコ創造都市ネットワーク」事業を2004年に開始した。このネットワークでは、7分野（映画、文学、デザイン、伝統工芸、メディアアート、音楽、食文化）において、世界の特色のある都市を認定している。

山形市は国際的にも高い評価を得ている「山形国際ドキュメンタリー映画祭」をはじめとした映像文化を育む環境が充実しており、映画分野だけにとどまらず、多彩な文化芸術が多く存在している。映画を軸に多様な文化とともにある山形の文化資産・創造力の可能性が高く評価された結果、2017年、日本で初めてとなる映画分野での加盟認定を受けた。

(2) ユネスコ創造都市に申請に至る経緯

2013年に山形国際ドキュメンタリー映画祭で「映像文化創造都市を目指して」の講演・シンポジウムが行われたことを契機に、加盟を目指すこととなった。その後、2014年、創造都市ネットワーク日本（創造都市の取組を推進、または推進しようとする地方自治体等、多様な主体を支援するとともに、国内及び世界の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォーム）に加盟。2015年には山形市創造都市推進協議会が設立され、ユネスコ創造都市の申請を行った。

最初の申請では加盟に至らず、2017年に二度目の申請を行い、認定を受けた。

山形市の創造都市認定までの歩み

2013	山形国際ドキュメンタリー映画祭2013で、「創造都市」のシンポジウムを開催
2014	山形国際ドキュメンタリー映画祭、山形市が創造都市ネットワーク日本 ^{*1} に加盟 創造都市政策セミナー(札幌市、横浜市)参加 創造都市ネットワーク日本総会(金沢市)参加 (英)ブラッドフォードフィルムサミット参加
2015	山形市創造都市推進協議会設立 創造都市ネットワーク日本シンポジウム参加(金沢市)、市長講演 ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会聴講(金沢市)及びロビー活動 ユネスコ国内委員会へ申請書提出 → 国内代表3都市に選出 専用ホームページ開設 ユネスコ本部へ申請書提出 → 加盟ならず
2016	創造都市国際交流事業参加(パリ・ユネスコ本部)
2017	ユネスコ国内委員会へ申請書提出 ユネスコ本部へ申請書提出 ユネスコ創造都市ネットワークの「映画」分野に 加盟認定 (10/31)

*1 創造都市ネットワーク日本(CCNJ)…創造都市の取組を推進する(または推進しようとする)地方自治体等、多様な主体を支援するとともに、国内及び世界の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォーム

18

(視察資料より)

(3) 申請の際の苦勞・工夫した点

2015年に最初の申請をした際、加盟に至らなかったことを踏まえ、翌年、市長自らがユネスコ本部で開催された創造都市国際交流事業に参加した。他の加盟都市と交流したことで、加盟するには映画だけではなく、多様な文化資産があり、横断的な取り組みをすることが求められることを認識することができた。

二回目の申請では、映画を軸として、50年の歴史を持つ山形交響楽団や茶道の流派を超えた山形宝紅会といった市民の長年の文化活動をアピールすることで、加盟認定を受けることができた。

(4) 主な事業

事業は大きく「地域プロジェクト」と「都市間・国際プロジェクト」の2つに分けられる。

ア. 地域プロジェクト

①映像で山形ルネッサンス

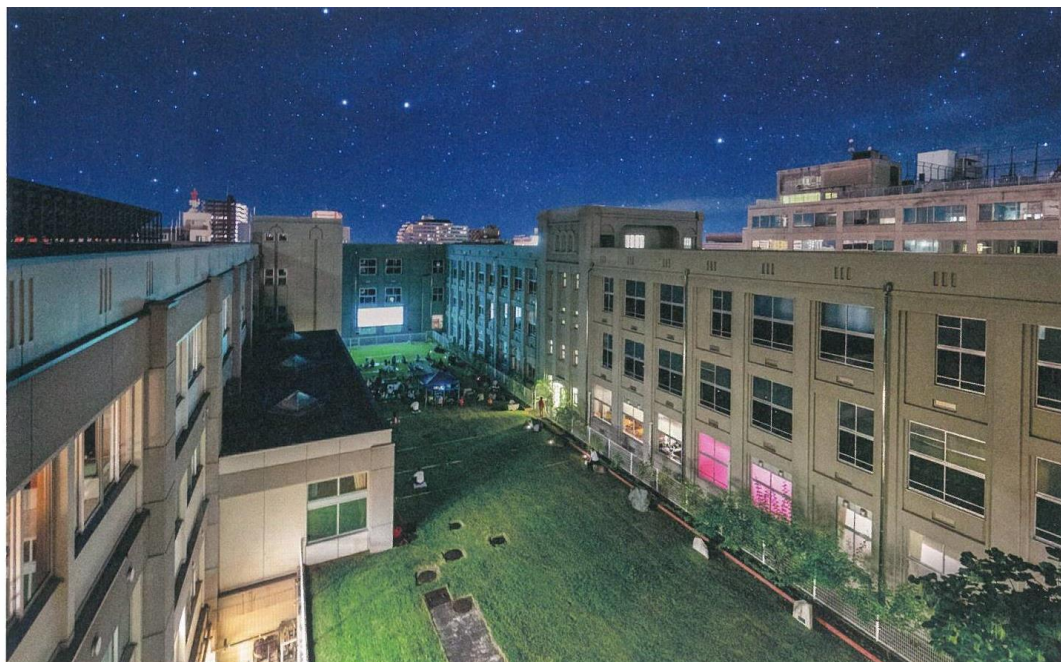
映像制作を通して山形の文化と魅力を見直すと同時に、地元映像クリエイターを支援するプロジェクトである。制作した映画には全て英語字幕をつけ、世界に山形の文化を発信している。

②クリエイティブカフェ

映画のみならず、文化に関する様々なテーマについて、アットホームな雰囲気の中、トークイベントやワークショップを行っている。

③やまがた市民映画学校

良質な映画を鑑賞する機会を提供することによって、市民に映画に親しんでもらうことを目的に開催している。



(視察資料より)

④映像教育

子供を対象に、映画の技術的な仕組みについて学び、映像制作に興味を持つきっかけとなるようなワークショップを実施している。

⑤山形フィルム・コミッション

映画、テレビドラマ、CMといった映像作品の円滑なロケ撮影をサポートする総合窓口であり、様々な支援を無償で行っている。

イ. 都市間・国際プロジェクト

①やまがた映画パッケージ to the world

多様な文化や価値観を共有することをコンセプトに、アジアの途上地域や創造都市などに映像作品を届けることを通じて、国際交流や協力を貢献している。

②やまがたアーティスト・イン・レジデンス

国内外の芸術家を招へいし、滞在中の創作活動や地域との交流を支援している。

③山形国際ドキュメンタリー映画祭

2年に一度、10月に開催される山形国際ドキュメンタリー映画祭は、1989年に山形市の市制施行100周年記念事業としてスタートした。

映画祭は、コンペティション部門だけではなく、映画製作の歴史と多様性に光を当てる特別プログラムやイベントも行っている。プログラムを通して、ドキュメンタリーという表現形式について議論を交わし、既存の映画とは異なる、自由で独立したノンフィクション映画制作のための新しい場を生み出すことに積極的に取り組んでいる。

④やまがた創造都市国際会議

国内外の創造都市担当者や映画関係者を招き、映画や創造都市をテーマとしてシンポジウムを開催し、映像文化が有する創造性や可能性、都市の未来について議論している。

(5) 加盟認定後の効果

多彩な文化を継承、発展させ、その文化と他分野との連携をまちづくりに活かし、持続的発展が可能なまちの実現を目指す文化創造都市の推進に市民や事業者等と取り組むため、山形市文化創造都市推進条例を制定した。さらに、この条例に基づき、山形市の文化の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進するため、山形市文化創造都市推進基本計画を策定した。

この計画に基づき、登録有形文化財・日本近代遺産である旧山形市立第一小学校をリノベーションし、やまがたクリエイティブシティセンターQ1として再活用する「Q1プロジェクト」を開始した。単なる観光施設ではなく、創造都市の7分野に関わる様々なテナントが入居しており、クリエイティブな人材と企業等をつなぐプラットフォームの形成、創造力による地域産業のアップデート、学生の地元への就職と起業の促進、地域経済の活性化等を目指している。



(やまがたクリエイティブシティセンターQ1)

(6) 今後の課題・展開

ア. 今後の課題

ユネスコ創造都市に加盟すると、4年に1回モニタリングレポートを提出しなければならない。2017年から2021年までの活動報告と今後4年間の取り組みの方向性について2021年11月にレポートを提出し、最高評価を得た。

今後は、ユネスコ創造都市を目指している他の都市に対して、加盟したノウハウを伝えていき、ユネスコ創造都市ネットワークの形成に努めていく。

イ. 今後の展開

山形市文化創造都市推進基本計画に沿って、ユネスコ創造都市ネットワークの構築、映画・映像文化の推進、文化創造リテラシーの機会創出を軸に、事業展開を考えている。これらの活動が、山形市の都市ブランドの形成につながり、地域経済への波及、市民生活の向上につなげていきたいと考えている。

3. 主な質疑応答

(問) なぜユネスコ創造都市に申請しようと思ったのか。

(答) 今後人口減少が進む中、都市として生き残るために、山形市の将来のビジョンとユネスコ創造都市の理念が合致したことから。

(問) 7分野（映画、文学、デザイン、伝統工芸、メディアアート、音楽、食文化）のうち、山形市は、食文化なども発展している中、なぜ映画を選んだのか。

(答) 山形国際ドキュメンタリー映画祭にて、山形市には世界に誇る映画文化があるという発案に基づき、選択している。そのため、映画を軸に創造都市を目指すことになった。

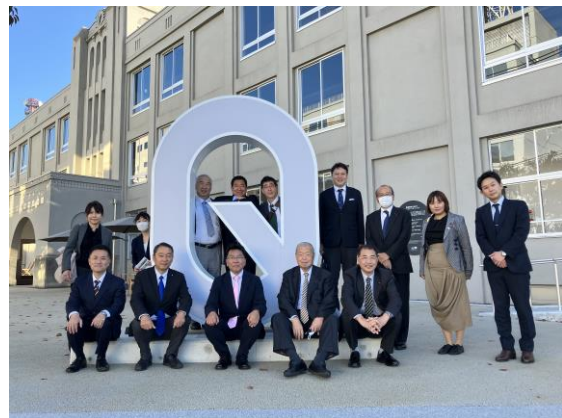
4. まとめ

地方の人口減少が進む中、山形市のユネスコ創造都市推進事業は「映画の街」を軸に、多様な地域文化資源をたくさんの人々とともに磨き上げ、新たな価値を生み出している。地域文化資源を様々な分野と連携することで、都市の観光価値が向上すると考えられる。実際に訪問したやまがたクリエイティブシティセンターQ1では、芸術や文化を愛するクリエイターはもちろん、市民や観光客が楽しめるユネスコ創造都市やまがたの拠点施設となっていた。

本区においても、世界文化遺産である国立西洋美術館、隅田川花火大会などの伝統行事、地場産業である皮革産業など、多種多様な文化資源があるが、ユネスコ創造都市ネットワークの加盟都市や他都市との交流や連携を交えながら、映像文化を基軸に多彩な地域資源を活用している山形市の取り組みは、文化の魅力発信を考える上で非常に参考になった。



視察の様子



やまがたクリエイティブシティ
センターQ1前にて

【宮城県仙台市】

1. 市の概要

人口 1,067,077人（令和5年8月1日現在）

面積 786.35km²

主な特色

- ・東北地方最大の都市で経済や行政の中核都市。県の中央部、仙台平野の中心に位置し、東は太平洋に面し、西は奥羽山脈を隔てて山形県と接する。
- ・江戸時代は伊達62万石の城下町として栄え、明治期以降、国の行政機関や各種教育機関の開設により、東北の治府として、また学都として発展。
- ・市街地と緑が共存する街並みから「杜の都」と呼ばれる。

2. 調査事項

せんだい・アート・ノード・プロジェクトについて

(1) 概要

ア. プロジェクトの概要

アーティストが仙台・東北をリサーチし、同時代性のあるアートを制作。調査・企画・制作・発表までの過程を人々と共有し、鑑賞にとどまらない「接点（ノード）」をつくる。

イ. プロジェクト実施場所であるせんだいメディアテークについて

2001年1月に開館したせんだいメディアテークは、様々な記録媒体（メディア）による情報を収集及び保管並びに提供し、市民の自主的な情報の検索、閲覧、記録、発信等の活動を支援するとともに、美術・映像文化の創造又は普及の場を提供し、もって市民の生涯学習の振興に資することを目的として設置されている。

2013年にプリツカー賞を受賞した世界的な建築家・伊東豊雄氏による設計の建物は、グッドデザイン賞や公共建築賞他の数々の受賞歴を誇り、定禅寺通りと一体となって仙台の都市景観を象徴している。館内には、多目的に使用できる1階プラザや、展覧会を行うギャラリー、上映会等を行うスタジオシアター、ワークショップやメディアを活用した制作を行えるスタジオ等を備え、市民図書館を併設して、年間推計130万人もの人々が来館する文化拠点となっている。

ウ. せんだいメディアテーク施設概要

規模	地下2階地上7階 敷地面積3,948.72㎡・建築面積2,933.12㎡・延床面積21,682.15㎡
開館	2001年1月26日
主な施設内容	地下2階 保存書庫、収蔵庫、機械室 地下1階 駐車場、保存書庫 1階 プラザ、カフェ、ショップ 2階 映像・音響ライブラリー、会議室、託児室、仙台市民図書館児童書コーナー 3階・4階 仙台市民図書館 5階 ギャラリー3300 6階 ギャラリー4200 7階 スタジオ、スタジオシアター、会議室
運営費	指定管理料及び補助金他 計702,216千円（令和4年度予算）
理念	<ul style="list-style-type: none"> ・せんだいメディアテークは最先端のサービス（精神）を提供する。メディアテークにとっての「最先端」とは、「提供する側」と「提供される側」といった立場を常に反映させていながら、メディアテークを成長させていこうとする精神。 ・せんだいメディアテークは端末（ターミナル）ではなく、節点（ノード）である。メディアテークは、チャンスという枝や葉を伸ばすノード。人々は、おだやかに異質なものに触れ、メディアテークの外へ、そして多様なものへ、その好奇心と向上心を広げていく。

	<p>・せんだいメディアテークはあらゆる障壁（バリア）から自由である。メディアテークは、身体的な障壁、性差、年齢差、言語障壁などさまざまな社会的な隔たりを、「使う」という立場から調整する「場」である。</p>
沿革	<p>2001年1月 せんだいメディアテーク開館 2011年3月 東日本大震災により被災し一時休館 5月 4階以下を一部再開 震災復興アーカイブ事業 「3がつ11にちをわすれないためにセンター」開設 2012年1月 全館再開 2013年4月 哲学者鷲田清一氏を館長に迎える。 2016年4月 せんだい・アート・ノード・プロジェクト 開始</p>

(2) 経緯・取り組み

ア. 経緯

横浜トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭などが各地で行われている中、仙台でも同様に国際芸術祭を行う機運が高まったが、仙台には素地がなく、まずはアーティストが関わりながら、アートの様々な事業を実施してみるという発案のもと、プロジェクトを開始した。

イ. 取り組み

・仙台インプログレス

津波被災した仙台市沿岸部・新浜地区及び井土地区で、世界的に活躍するアーティスト川俣正氏によるプロジェクトを展開。地域住民や関係団体との関係を深めながら数年単位で実施。貞山運河で南北に連なる地域の魅力を発信し、沿岸部の現在への理解と足を運ぶ機会を生み出している。

・ワケあり雑がみ部

仙台市のごみ分別区分のひとつである「雑がみ」を利活用し、造形活動を行う市民参加型部活動を展開。アーティスト藤浩志氏によるプロジェクト。環境・造形・紙・歴史など「雑がみ」への多様な関心をもとに、参加者の主体性が発揮され、活発なコミュニケーションとコミュニティが生まれる機会を作る。



(視察資料より)

・TALK アートや文化の今を聞く

現代アーティストや専門家を招き、自身の制作での経験に基づいた考えを話すトークイベント。アーティストの意思や考えに触れることで、より深く市民にアートへの関心を持ってもらう。

・MEETING 自由参加型公開会議

アート・ノード・プロジェクトの事業検証を公開で行い、これからの事業の方向性を参加者も交え、探っていく機会を提供する。

・JOURNAL アートノード・ジャーナル

アート・ノード・プロジェクトや東北のアートシーンの動きを広く伝える情報誌。



(視察資料より)

(3) 今後の課題について

配属されている職員の人数が少なく、新規事業を実施する場合でも、他の事業と掛け持ちをしている職員が多いことが課題としてあげられる。

3. 主な質疑応答

(問) ワケあり雑がみ部の事業のように清掃・環境系の部署との連携が多いのか。

(答) ワケあり雑がみ部はごみにきれがちな紙袋やお菓子の紙箱・ちらし・包装紙・カレンダー等の資源物「雑がみ」で何かできないかという仙台市環境局の提案をきっかけに実施している。今後は他方面の部署とも連携していきたい。

(問) せんだい・アート・ノード・プロジェクトは国際芸術祭の素地作りがきっかけでスタートしたとのことだが、実施にはどれくらい近づいているのか。

(答) まだまだ道半ばと感じており、15年を目標に行っている。芸術祭を実施するかは分からないが、市民の芸術に対する関心が深まったとすれば意義があると感じている。

4. まとめ

せんだい・アート・ノード・プロジェクトは優れた現代アートのもつ発見性、吸引力、発信力を取り込みながら、市民とともに地域が抱える課題に向き合うアートプロジェクトを展開することで、まちの魅力と人々の活気を引き出し、文化都市仙台を発信している。今回の視察では、せんだいメディアテークで行われているワケあり雑がみ部の活動を実際に見学した。

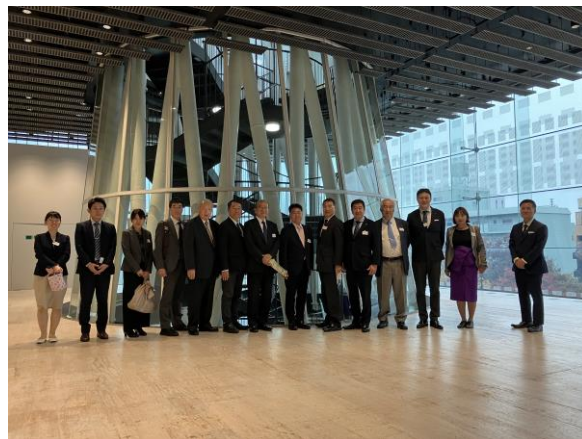
ワケあり雑がみ部では、雑がみという、集めやすく、多様であり、誰もが扱いやすく親しみや

すい素材を使って楽しむことから、せんだいメディアテークだけでなく、商店街や小学校でのワークショップへと広がりを見せている。

博物館や美術館を数多く擁する本区は、気軽にアートに触れることのできる環境であるが、現代アートを鑑賞するだけでなく、市民にとって身近で触れやすいものとするせんだい・アート・ノード・プロジェクトの取り組みに今後も注視していきたい。



視察の様子



せんだいメディアテークにて